

## 現代エストニアにおけるロシア語：機能、研究、特質

エリザベータ・コスタンデイ著 翻訳・解説 芳之内 雄二

### キーワード

ロシア語、社会言語学、言語政策、離散民の言語、言語接触

周知のように、今日、ロシア語普及調査の詳細な分野の一つは離散民状況下でのロシア語研究であり、それはラトビア、アルメニア、カザフスタン及び他の旧ソ連諸国、さらに所謂遠い外国に住む人々のロシア語運用の特性として出現しているものである。1990年代初めの様々な国々での独自の特性を持った新たな政治・経済・社会・技術その他の分野の新状況出現により、必然的にロシア語の変容とより大きな可変性が生じている。その時期の各地のロシア語特徴を記述することが離散民のロシア語研究者の基本課題となり、しばしば互いに無関係な個々の研究として行われてきた。ところで、こうした状況が10年ほど続いた後に、様々な国でのロシア語研究に取り組む研究者の積み重ねた研究成果の体系化と統合化の必要性が強まった。研究者グループがいくつも組織形成され、ディアスポラ条件、特にエストニアにおけるロシア語をテーマとした研究大会が定期的に開催され、研究論文集が発行されている。例えば、バルト地域にとって1997年にタルトゥ大学で開催され、一年後ビリニュス大学、その後ラトビア大学で引き続き開催されたディアスポラのロシア語をテーマとした第一回総合研究大会開催は特別な道標となった。これらの大会の結果、いくつかの研究論文集（文献リスト34, 41）が発行された、その論文著者達はディアスポラ条件下でのロシア語研究の個別分野を分析調査し、より一般的な研究目的を提起（文献リスト5, 24, 37）している。その後、ロシアも含めて多くの国の研究者が参加した研究協力は恒常的なものへと進展している（文献リスト34, 35, 43）。現在は新たな研究段階にあると言えよう。ディアスポラの言語運用の特徴を記述して体系化する時期は、一般的な言語学的問題の視点からの総括と記述特性の検討、例えば言語の可変性、規範性、命名特質、語用論、言語運用ジャンルの種類、推論的経験等といった方向にこの数年変化してきている。当該論文は様々な著者の研究成果を総括する試みを行い、今後の研究予定の方向性を明らかにすることを目的とする。強調しておくが、現在このテーマの刊行書は多数存在しており、それら全てを論文末の文献リストに列挙することは決してできることではない、もし列挙しようとするればリストは膨大なものになってしまうであろう、という訳で論及に際しては具体的問題に関係する全ての研究論文を挙げてはいない。

我が国のロシア語特性の考察はエストニアでロシア語がいかなる領域でどの程度使用されている

かを簡略ながらも記述することを前提とする。1995年に採択され一再ならず補足された言語に関する現行法によると、エストニアの国家言語はエストニア語であり、他の言語は外国語と見なされている。最近の人口調査データによると2011年12月31日現在、エストニアには32万1198人のロシア人が居住しており、ロシア語を母語として使用している者は38万3062人いた。エストニアのロシア人の約3万7500人は所謂「古老」である、つまり先祖代々の公民であり、彼らの両親がこの地に独立エストニア共和国存在の最初の時期の第二次大戦前に住んでいた。だが、ロシア人住民の大部分は戦後の国内移住者、或はその子孫である。

「古老」の中の約3千人は村落地に住んでおり、方言話者である（文献リスト24）。彼らは主として古儀式派信徒であり、チュード湖西岸と東岸、ナルヴァ川両岸に住んでいる。エストニア国内にはロシア語人（訳者注：ロシア語母語話者の意味でありウクライナ人やベラルーシ人も含む）が集住する地域が幾つかある。イダ・ヴィル県（エストニア北東部）、チュード湖西岸地域、首都タリンの幾つかの地区、タルトゥ市、バルヌ市がそうした地域であり、その他の地域ではロシア語人は集住居住していない。

エストニアにおけるロシア語はソ連時代に比べると、もちろん、多くの機能を失っているが、それでもある程度積極的に使用されている分野として、マスコミ、教育、文化、経済、学問、公的業務分野、日常生活交流などがある。エストニアのロシア語普及については、現在印刷中の私とイリーナ・キュリモヤの共著論文で詳しく述べている、その論文資料は論文著者の同意を得て一部は学術雑誌「Слово.ру: балтийский акцент」（文献リスト8、エプストラトヴァ編集）に以前に発表している。マスコミについては、繰り返しになるが、現在日刊紙の全国紙新聞2誌（「Молодежь Эстонии」と「Postimees на русском языке」）、幾つかの週刊新聞（「День за днем」、「МК Эстония」、「Вести」、「Здоровье для всех」、「Деловые ведомости」およびその他）、幾つかの地方新聞（「Столица」（二言語）、「Южная столица」、「Северное побережье」（二言語）、「Чудское побережье」（二言語）、「Нарвская газета」およびその他）が発行されている。タリンでは市内5地区で二言語新聞が出ている（文献リスト1）。国営ラジオロシア語放送番組「Радио 4」及び民営ラジオ放送局「Русское радио」、「Sky Radio」その他の放送がある。国営テレビロシア語放送局はないが、国営エストニア語放送局「ETV2」ではロシア語による多くの番組が放送されており、一部のエストニア語放送はロシア語の字幕が付いている、その他、民営ロシア語放送局がある。エストニアでは人工衛星テレビ受信システム圏に入っており、ロシアの主要衛星テレビ放送（НТВ Мир、РЕН ТВ、РТР Планета、ТВЦ その他）および他の国々のロシア語放送を受信できる。バルト諸国共通の第一バルト放送局があり、その番組の基本部分はロシア第一放送局の番組であり、これにバルト諸国全体とラトビア、エストニアそしてリトアニア各国向けに放送されている番組を加えたものが放送されている。エストニアはインターネットのアクセス容易性と利用者数において世

界でトップクラスの国である、そこでロシア語人住民はニュースサイトのロシア語版「Делфи」とロシア語新聞サイトを利用してロシア語で地域情報を得ることが可能である。言うまでもなく、インターネットによって様々なロシアやヨーロッパや世界のマスコミにアクセスが可能である。

エストニアの普通教育学校数は人口減のため近年は減少してきている、それ以外でもロシア語学校は余分な変更を余儀なくされている。すでに1990年代に採択されていた法令により、2007年から中等専門教育段階（10-12年）のエストニア語教育への段階的移行（60%の科目）が始まった（一年に一科目）。所謂、基本学校（1-9年）ではロシア語学校が残存している。この移行に際して、多くのロシア語人両親は国家言語を良く習得する必要性があることを理由に、自らの子供をエストニア語学校へ通わせている。こうしたバイリンガルの子供たちの言語運用特徴は既に1990年代に専門家たちの注目を集めていた（文献リスト27, 28）。だが、他の両親や生徒にはロシア語中等専門教育段階での一部科目のエストニア語教育への移行は否定的な態度を呼び起こすものであり、変化に対する統一的意見はない。母語教育、当該ケースではロシア語であるが、それは言うまでもなく他言語へ移行する訳ではない、さらに、現在実施されている新カリキュラムによれば母語教育科目の授業時間数は事実上増大している。母語（ロシア語）カリキュラムは初等中等高等教育に従事する教員と教育科学省職員によって組織された委員会によって作成されたものであり、基本学校と中等専門学校では言語学、教授法、教育法の現状を反映したものである。

中等専門学校と大学では大部分の学生はエストニア語で学んでいる、ごく一部の学生だけがロシア語及び英語カリキュラムの授業を履修している。全員とまではいかないが大部分のロシア語人若者がエストニア語とさらにもう一つの外国語、大抵は英語を流暢に使えることを指摘しておく必要がある。この他に、大学では交換学生と交換教員のヨーロッパカリキュラムが積極的に実施されている、そこで大学講義室や大学都市タルトゥの街中ではエストニア語やロシア語や英語のみでなくドイツ語、フィン語、スペイン語、イタリア語やその他の言葉を耳にすることがある。

教育分野におけるロシア語機能側面の一つとして外国語としてのロシア語教育がある。この点でロシア語は学生の間で人気がある、なぜなら、特に雇用主はかなりしばしば被雇用者にロシア語理解力を要求するからである。普通教育エストニア語学校で外国語としてのロシア語は学習生徒数では英語に続いて二番目の立場を占めている。

エストニアの文化活動においてもロシア語は十二分にとまではいかないものの一定の役割を果たしている。文芸雑誌（「Вышгород」、「Таллинн」）が発行され、タリンには演劇場があり、2012年にはロシア博物館が開館した、国内の様々な博物館ではロシア語による見学案内が行われており、図書館にはロシア語文献がある。夏季の歌の祭典「Славянский венок」、古代正教国際文化祭「Пейпус」、祭典「Золотая маска в Эстонии」その他が開催されている。多くの地域の学校と大学などには様々な自主団体がある。多くのイベントに対して財政支援を行っているのが文化省と財団

「Эстонский капитал культуры」である。エストニアで行われている映画祭、演劇祭、文学祭ではロシア文化も一定の役割を演じている。エストニアには有名なロシアの劇団と楽団や個々の出演者がツアー公演で訪れている、様々な祭典にはロシアの映画監督、俳優、作家、ジャーナリストが参加している。

公的業務分野でのロシア語は最低限レベルの働きしかしていない。エストニアの実務言語はエストニア語であるが、地方自治機関は言語に関する法令により内部実務は当該地区に居住する民族少数派言語で行うことが可能である、他方、裁判手続きと取り調べ過程は状況により何れかの言語で行うことが可能である。法令は他の最も一般的な一連の規則についても規定している、日常生活では様々な公文書がしばしばロシア語訳付きで出されている。例えば、議会、大統領府及び他の国家機関は国家言語を使って活動している。従って、法令文書、外交文書と他の文書はエストニア語で書かれている。ところでロシア語もここで一定の役割と持っている、確かに、基本的には翻訳文書として紙や電子媒体で出現するものではある。例えば、国家権力サイトのロシア語版として <http://www.president.ee/ru> (大統領サイト); <http://www.riigikogu.ee/lang=ru> (議会サイト); <http://www.eesti.ee/rus/> (国家サイト)があり、行政省庁、中央裁判所、一部の県・市・党・組織その他のロシア語版サイトが存在する。警察局、国境守備局には翻訳部が置かれており、ここでは市民に直接関係する(罹災者・被疑者・証人調書、申告などの)文書が必要に応じてロシア語からエストニア語へ、或はエストニア語からロシア語へ各県の警察に勤務する常勤翻訳官によって翻訳、通訳がなされている。

公的業務文体のロシア語は銀行、電力会社、電気通信、輸送、建設、観光などの企業や商店ネットワークによって住民に提供されるサービス部門で住民に提示されている。ビジネス分野のロシア語は翻訳言語としてまたオリジナル言語としての役割を持っている、それは企業経営者と従業員がいかなる言語を使用しているかに依拠している、エストニア語とロシア語だけでなく国際企業では他の言語も利用されているからである。

勿論、日常生活や私的事物や宗教などの分野ではロシア語人住民は母語を使用していて、そこでは定期的にロシア語はエストニア語に接触している、なぜなら隣人として、あるいは一緒に様々な母語を話す人々が暮らし、働き、遊び、旅行をしたり治療をしたりしているからである。日常生活では極めて珍妙な言葉の錯綜・もつれ合いが見られる。現在ではエストニアも含めてEU全体で現実状況に応じて様々な言語の多言語習得が積極的に宣伝され、支援を受けていることを補足説明しておく必要がある。言うまでもなく、課題・紛争・未解決の問題が存在し、それらは人々にとって複雑で時には異常に感じられている。

以上略述した様々な機能領域におけるロシア語の表現、しばしば二つ或は時に幾つかの言語の共存、前述の政治的・社会的・経済的・文化的・日常的及びその他のレアリアは作り上げられて来た

ものであり、今後も地元ロシア語の特性が作り上げられ続けていくであろう。そうした特性は、例えば、ロシア語が様々な領域でどの程度の働きを持っているか、ラテン文字・エストニア語単語の借用・地元の新語の利用の程度、単語や語結合の意味的变化（文献リスト9）、一部語結合タイプの形成力、一部の文書類等の作成と機能といった条件に応じて一連の使用実践の有無に反映されている。概説的論文ではこうした特性形態の全てをせめて簡略にでも叙述するのは不可能であるから、この先は最も明瞭な特徴について論じることとする。

1990年代に始まったロシア人ディアスポラ言語の研究は以下のような様々な資料を基に行われている。それはマスコミ（新聞、ラジオ、テレビ、インターネット）、広告、実用的文書（パンフレット、ラベル、行事計画等）、話し言葉、俗語、公的実務文書、方言資料、インターネット媒体での交流、回顧録などである。そこで第一に注意を引くのはエストニア語の明白な影響特徴である（広い意味では全体としての二言語状況）、具体的にはロシア語運用の際の外国語混入である。この現象は初期におけるわずかな混入からその後の頻繁な混入、そして命名・参照・言語記号利用条件・言語コード変換などの一般的問題の視点からの分析に至るまで様々な研究者により度々分析されてきた（文献リスト1, 18, 19, 24, 25, 39）。文字テキストでは外国語混入はラテン文字でしばしば示されていて、この文字利用は言語記号と実在物との同義照合相関性を行う必要性によって一般に条件付けられている（文献リスト18, 19）。口頭言語での混入は一般的、或は文法面で部分的にロシア化したピジン・エストニア語特性を呈する。当論文は概略的なものであるためこの現象の詳細には触れず、個別具体的な用例を以下に示すにとどめる。

*Дополнительные вопросы о вступающих в силу с 01.07.2009 изменениях в выплате компенсаций по нетрудоспособности можно задать Eesti Haigekassa по электронному адресу<...> (сайт Министерства культуры) (2009年7月1日から発効する労働不能補償金支払いの変更に関する規定外の質問は「Eesti Haigekassa (エストニア健康保険組合)」宛電子メールアドレス (...)に出すことが可能です (文化省サイト)) ; Postimees на русском языке (название газеты) (ロシア語版「Postimees (郵便集配人)」(新聞名称)) ; От границы до границы! Походная тропа РМК от Оанду до Икла – 370 км удивительно красивых видов природы Эстонии! (рекламн.) (国の果てから果てまで! オアンドウからイクラまでの「РМК (林野管理センター)」のハイキングコース (宣伝))、エストニアの驚くべき美しい370キロの自然の景観) ; Фестиваль Klaasparlimang 2011 (афиша)(2011年「Klaasparlimang」(歌の祭典) (ポスター)) ; У нас сегодня коолитус (koolitus – курсы) (私たちには今日「(коолитус (授業))」があります) ; Ну / я не помню там ... хинд (hind – цена) (でも私は「хинд (値段)」とか覚えていないのです) ; Да лепинг (lepping – договор) подписать надо (разг. речь) («лепинг (契約)」には署名が必要ですよ (話し言葉))。*

研究者の調査によると各地のロシア語方言（文献リスト30, 33, 35, 42）で状況は類似している。個々のエストニア語混入利用は所謂コード転換と呼ばれるきわめて単純な現れであり、交流の際にある言語から他言語へ転換する際に頻繁にみられるもので、それは多言語共存状況下に特有である。特殊なコード転換は、他国出身のロシア語話者との交流状況においても、話し相手に理解しがたい地元の特種名称利用を回避する際に生じていることを指摘しておく。

ディアスポラの言語特性として、資料分析によると、所謂隠れた借用と呼ばれるエストニア語の合成語あるいは語結合の模写語と半模写語表現の流布がある。こうした模写借用表現は時には同じくエストニア語によって借用されたことがあり、それは幾つかのケースでロシアとエストニア（或は他の国々）のロシア語の中に登場することとなり、第三の言語、例えば英語、ただし我々の条件では原則として仲介言語（エストニア語）を通じてロシア語運用に入り込んだ同等或は近似の借用語名称であった。エストニアのロシア語に見られる模写借用の広がりには以下のような安定した定語的語結合・名称の出現をもたらした。личный код（個人情報コード）、материнская зарплата（母親給料）、основная школа（基本学校）、учебный план（学習計画）、семейный врач（家庭医）、больничная касса（健保組合）、налоговый департамент（税務局）、касса по безработице（失業基金）、физическое лицо-предприниматель（法人）、целевое учреждение（特定施設）、прямое платежное поручение（直接支払い依頼）など。特に積極的にこれらの語が作られ定着が生じたのは独立エストニア国家の復興初期であり、それはロシア語にもエストニア語にも名称がなかった多くの新たな政治・社会・経済・日常生活その他の現実が出現した時期であった。政治社会組織、国家体制、社会構造などは通常最初にエストニア語で（オリジナルあるいは借用した）名称が付けられ、それらはその後ロシア語に翻訳された。商業、広告、旅行などの分野ではエストニア語の文書翻訳の際に同じく定期的に同様の模写借用が出現したが、そこでの以下のような借用語が安定的に使われることはほとんどない。дружелюбный к детям（子供に友好的な）、обогреватель воздуха（温風機）、вешалка из дерева（木製ハンガー）、концертный дом（コンサート館）、полотенце для кухни（キッチンタオル）、ответственное предприятие（責任企業）、перчатки для работы（仕事用手袋）、сушеные абрикосы（干し杏）など。こうした語の形成と機能の原因と性質については部分的な記述（文献リスト14, 19, 31）が見られるが、具体的資料の多様性、様々な機能文体テキストにおける模写借用語利用特性、借用語習得プロセスでの変形は今後の分析を必要としており、現在それが行われている。エストニアにおけるロシア語方言、「古老」の言語運用全般では、借用は最近の時期のみでなく、はるか昔からのものである。方言で使用されている400以上の借用はブルダコヴァの学士論文（文献リスト2）の中で扱われている。

上に特性記述した語結合模写借用はディアスポラ言語の名称付け分野のみでなく統語面での特殊

性であることをも示している。ロシア語の限定的語結合は周知のように可変性が特徴である（参照 *чердачная лестница* / *лестница на чердак*（屋根裏部屋への梯子）； *московский гость* / *гость из Москвы*（モスクワからの客）； *молочный кувшин* / *кувшин для молока*（ミルクピッチャー）； *клетчатая юбка* / *юбка в клетку*（チェック柄のスカート）。資料の研究分析によれば、ディアスポラ条件下でロシア語変種性は特に翻訳の際に語結合出現に重要な要因として影響を及ぼすことが明らかになっている、そうした語結合は形態的意味的にはしばしば正しいものの、完全にロシア語的なものではないと理解されている（*вешалка из дерева* / *деревянная вешалка*（木製ハンガー）； *перчатки для работы* / *рабочие перчатки*（仕事用手袋）； *полотенце для кухни* / *кухонное полотенце*（キッチンタオル）。翻訳者・通訳官が選択する語彙、語形態、統語結合のタイプと方法は「弱点」となっており、そこでロシア語は他言語の影響を受け易くなっている。地元資料の他の統語借用例の分析から明らかなのは、ディアスポラ言語の統語特性は第一に接続面－等位接続でも従位接続でも、複文成分やテキストの接続でも－に表れている。エストニアのロシア語諸文書はオリジナルもあれば翻訳ものもあること、上で指摘したように翻訳ものは一部活動分野で広範に普及していることを考慮に入れておく必要がある。まず第一に、翻訳に際して統語接続の特質と方法が「被害を被る」、ところで大量の翻訳文書は翻訳時に文書中に出現した特殊特徴がオリジナルロシア語文書にも影響を与える働きをもつ。接続面以外に、他の一部の統語特性、そして広い意味で文法特性についても言及することができるが、それらはあまり規則的に見られることではないので、一部ケースではなく一般的傾向であることを明らかにするために今後も様々な資料の収集と分析を行う必要がある。

現在断言可能なことは、ディアスポラの言語、と言うよりも言語行為の顕著な特性は書法・語彙・統語分野で見られる、と言うことである。同時にこうした特性の「隠れた」現れが存在する、それらはあまり顕著ではないのでその発現のために重要な様々な資料を分析する必要がある。ディアスポラ条件下での言語行為で形成される特徴は個々の言語単位やその記号に現れるのではなく、一般に実用的コミュニケーションや認識面に限定されうる領域に現れる。それは、例えば、ロシアの現実に比べてのある種の頭脳活動の変化、評価の性質と評価表現方法、バイリンガルの相手への対応、言語的内省、空間的・時間的現地化その他の領域である。現地資料におけるこれらの特徴分析は多くの論文の中に見られるが、個々の現象のみが部分的に記述されている（文献リス6, 7, 8, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 21, 31）、そうした特徴は定式化、体系化が困難であり、ましてやその中の現地構成要素を分出するのは難しいだけに無理も無いことである。勿論、一論文のみでは指摘した全ての現れを十分吟味することだけでなく、それらを簡潔に特徴付けすることさえ不可能である。そこで、以下では概略的に個別事例を検討することにする。それは、ディアスポラ条件下におけるロシア語言語活動の隠れた特性として理解されていることについて一定のイメージを提供するものと

思われる。そこで言語的内省、時間的・空間的現地化、言語的頭脳活動について論じることにする。

周知のように、言語的内省は言語活動に付随した構成要素であり、特に所謂内省要素、使用単語や表現への解説を含む比較的完成したメタ言語表現に現れる。明らかに、多言語共存状況ではかような内省は切実な問題となる、なぜなら大部分の話者や書き手にとって、言語選択（エストニア語・ロシア語）の必要、或は様々なコミュニケーション状況下で様々な相手との交流の際により相応しい言語手段選択の必要性から常に始めなければならないからである。こうした必要性は例えば、ロシア語話者がエストニア語を知らぬままにロシア語理解力が低い相手に話しかけている際に必要となる。もしも、この話者が自分のことを理解して欲しいのであれば、言うまでもなく、ゆっくりと話し、簡単な単語・語句などを使うであろう。こうした状況は常のことであり、通常以上の言語的内省の要因となっていて、言語活動において多くの数の内省要素を生み出すことになっている、と推測することができる。この推測は、例えば、口語の録音記録が証拠立てとなっている、その記録の分析結果は公表論文（文献リスト22）の中で述べられており、以下で短く要約する。調査資料は現地のロシア語話者住民の20分から60分までの自然な口語記録約40からなっている。全ての録音記録は例外なく様々な機能を持つ多様なメタ言語表現を含んでいた。当論文は様々な種類のメタ言語表現を詳細に扱うものではないので、メタ言語表現の中で多かった最も典型的に現地の特殊性と結びついたもの、つまり多言語共存状況を反映するもののみを指摘にとどめておく。その内容は概して以下のようなものである。

1. 多言語共存状況について言及し、解説し、批評するもので、例えば以下のような表現である。

*И я короче / пишу пишу там / потом опять начинаю / и он меняется / на какой-нибудь эстонский или английский /... Короче / такой бред выходит / что я пишу русскими буквами / эти / эстонские слова.*

(要するに、書き続けるのだよ、そしてまた始めるのだよ、それは何かエストニア語か英語に変わってね、要するにひどいものだよ、私はロシア語文字でエストニア語の単語を書くんだよ)

2. エストニア語や他の外国語の単語・語結合とそれに相当するロシア語の意味を議論するもので、以下のような例がある。

*Б. Не видела таких // вкусный /вкусный пирог / А. Это не пирог / Б. Пирог / Видишь / написано «kook»/ а это пирог /А. Ну мне кажется ...это многозначное слово... и там / Б. «Kook» это пирог и все!*

(B「私あんなの見たことない、美味しい美味しいピロシキね」A「あれはピロシキじゃないよ」  
B「ピロシキよ、ほら kook と書いてあるでしょ、これはピロシキよ」A「でも私にはそれ



は複雑な意味の単語のように思える、それに・・・」B「kookとはピロシキのことよ、それだけのことよ!)

3. ある言語での誰かの言語活動を特徴づけるもので、以下のような例である。

A. *Я даже теперь знаешь // когда говорю / я начинаю переводить с эстонского на русский // Это так ужасно // так конструкцию предложения ...* B. *Коряво ...* A. *Да / коряво так получается.*

(A「私は今はもう、あのね、話すときにエストニア語からロシア語へ翻訳を始めているのよ、それはひどいものでね、文構成を・・・」B「たどたどしく・・・」A「そう、たどたどしいものになるのよ!)

この種の大量の例はディアスポラ状況下での言語的内省の活性化について、人々によって多言語共存問題の切実な自覚について証拠立てるものである。

以下では空間的・時間的・現地化を論じることにする、それは周知のようにコミュニケーション単位(文とテキスト)形成の不可欠条件であり、さらにこの他にパラメーターであり、人の多くの生活活動領域における基盤である。従って人の言語活動でのその現れは元来の言葉よりも言語の使い手の「世界観」特徴を示すものである。勿論、ディアスポラ言語活動で場所と時間を表示し特徴づける基本的(語彙、文法的)手段はロシア語総体の中に存在するものと違わない。同時に、自らの所在地システム形成の明白な要素も存在する、それについては幾つかの個別例に限定して示すことにする。

空間的・時間的・現地化の特徴付けは広く知られ再三言語学者が引用した文句「*Доброго времени суток!* (良い一日を!))」によって前置きすることができよう。この文句は数年前にいろいろな時間帯そして様々な国にいる相手に向かって電子メールとマスコミで頻繁に使われ始めた。具体的な時間を限定しない挨拶は仮想及び現実時間におけるパラメーターの曖昧さを明らかに示している。現地特性を示している例としてバルト諸国向けのロシアの「第一チャンネル」を基に、主にロシア放送と個々の現地番組からなる内容を放送していて、ラトビアに中央放送局がある衛星放送「バルト第一チャンネル」の総合ニュースを見てみよう。この資料の詳しい分析は個別論文(文献リスト12)に記されている。

当該総合ニュースの構成と内容が目指すのは統一的コミュニケーション空間創造でもあり、ラトビア・リトアニア・エストニア聴衆の特性再現でもある。総合ニュースの最初の部分はロシア番組「*Время*」で占められ、その後現地の宣伝挿入の後で3か国の各国向けに同時に流される現地ニュースが続く、エストニアでは「エストニアニュース」である。放送はリガのスタジオで行われていて、装置、音声伴奏、ロゴタイプ、情報の選択と提供方法など多くの点でロシアと類似している。結果として仮想空間が形成され、それは部分的に行政区「刻印」を伴うものの明確な国境を持たぬ「揺

れ動いている」空間として特徴付け可能である。この空間の基本的パラメーターは、ロシア（リガに中心がある）バルト諸国—バルト各国、といったものである。

言語外での所定パラメーターは、特に空間的現地化を表す指示的言語手段 (*здесь* (ここでは), *у нас* (我々のところでは), *у соседей* (近隣の人々は), *поблизости* (近くで) など) の利用によって補足される。例えば、リガに滞在するディレクターの話の中での決まり文句「我が国」はラトビアにもエストニアにもリトアニアにも当てはまる。「エストニアニュース」のディレクターが使う「隣国ラトビア」「我々の南の隣人」などの言葉は（情報の受け手がどこからの放送かを知っている場合には）付加的ニュアンスを持つことになる。アナウンサーに関しては以下の言語外要因も指摘しておく必要がある。小国エストニアではテレビ局職員（アナウンサー、司会者、特派員）はある程度皆に知られているので、見知らぬ人物（アナウンサー）は若干の拒否感や疎遠さを呼び起こす。このような感覚は言葉遣いの特殊性によって強化される、あるアナウンサーの現地エストニア地名（Кейла-Йые, Йыхви, Тоомпеа, Ласнамяэ, Ёйсмяэ）の発音が若干不自然でエストニア語とも現地ロシア語とも異なっている場合がそうした例である。エストニア人の名前、政党・企業・団体名称など、例えば Ахто Ээсмьяе, Яак Йьеруйт, Юри Каськ, Пеэп Авиксоо, Рийгикогу, Исамаалийт, Таллинна Вэе などの発音はそうしたものである。結局、語用論の最重要要素である知覚作用に影響を与える「身内」と「よそ者」といった独特の相互関係が形成される。だが、指摘した違和感はそれでも全く容認されるものであり、反応はあまり切実なものではない、と思われる。特派員は「身内の人々」であり、そのことが上で指摘した拒否感をいくらか弱めている。このように言語外及び言語手段の合成によって形成される空間的現地化は単純ではない。

空間的現地化の視点からの情報選択について言えば、「エストニアニュース」の大部分の資料はエストニアに関するものではあるが、一部現地報告はラトビアやリトアニアの出来事を扱っていて、それは定期的であることもあれば時には偶発的なものであることを指摘しておく。そうした場面を挿入することはバルト諸国の統一コミュニケーション空間形成の助けとなっている。

時間的現地化の点では、それはテレビチャンネルが存在した時期（訳注：ソ連時代のエストニアテレビチャンネル）にいくらか整理されたこともあり、ほとんど表面化しない。全ての特徴は取り上げず、一例だけを引くことにする。「Время」のニュース番組放送直前に画面に文字盤が現れる、数年前までそこにはバルト諸国の現地時間とは異なるモスクワ時間が示されていた、その結果、時間的目印は空間的なものと同様に曖昧なものとなった。今では文字盤には現地時間が示されているが、ニュース放送中は定期的な実際のモスクワ時間が現れる、それは不明確さを引き起こしうるものである。

という訳で、テレビの例では空間的・時間的居所は多段性が特徴である、ということが可能であり、その結果、ロシア（及び他のケースでは世界）、全バルト、現地の空間と時間が互いに連関する。

現地の空間的・時間的・現地化の特性は別の現れも持っているが、当論文内で多くの多様な例を検討するのは不可能なので、一例だけ引くことにする。我々の条件下では多くの期日、祝日、ある種の活動期間、生活時期（所謂育児休暇、学校・大学での学習期間と段階、軍隊勤務期限、年金受給年齢など）は当然、現地固有の現実に結びついていて、しばしばロシアとは異なっている。エストニアの空間的・時間的・現地化を持つ文・語結合・話し言葉の文句・マスコミ・宣伝・公的業務文書の例を以下に引用する。

*Поздравляем со всеми Рождествами и Новыми годами!* (из поздравительной открытки) (全てのクリスマスと新年おめでとう (祝賀ハガキ)) ; *Да это в эстонское время было* (いいえそれはエストニア時間でした) ; *Это по российскому времени прибытие указано* (それはロシア時間での到着を示しています) ; *О! Русский Новый год отмечают!* (разг. речь) (おや、ロシアの新年を祝っているよ (口語)) ; *Огни Яановой ночи зовут!* (рекламн.) (聖ヨハネ祭の火と呼ばれている (広告)) ; *Наш северный / южный / восточный сосед* (我々の北・南・東の隣人) ; *Отечественные товары пользуются спросом* (母国の商品に需要がある) ; *Усиливающийся юго-восточный ветер принесет более холодную воздушную массу* (из СМИ) (強まる南東の風が一段と寒い大気団をもたらす (マスコミより)) ; *основная школа* (9 классов) (基本学校 (9年)), *гимназия* (10-12-й классы) (高校 (10-12年生)), *триместр* (3学期制), *рождественские каникулы* (クリスマス休暇), *отпуск по уходу за ребенком (до трех лет)* (産休 (3年まで)), *бакалавриат* (3 года) (学士課程 (3年)), *магистратура* (2 года) (修士課程 (2年)), *докторантура* (4 года) (博士課程 (4年)), *семестр* (セメスター), *сессия* (試験期間), *пенсионер* (после 62-65-ти лет) (年金生活者 (62-65歳以降)), *срочная служба* (8 месяцев) (期限付き勤務 (8か月)) などなど。

各例が分析を必要とするものだが、今は行わない、なぜなら当論文の目的はディアスポラの言語活動特性の共通特徴付けを行うことにあるからだ。最後に、ある現象、ロシアの現実にもエストニアの現実にも頻繁に現れる言語・頭脳活動における差異について取り上げることにする。

現在のロシアで切実になっている (文献リスト 4, 10, 11, 23, 29, 32) 新たな頭脳活動はディアスポラ状況下では類例が乏しかったり、断片的にしか現れないものである。例えば、私的情報を掲示する為に利用される広告、掲示板としての輸送機関、ベンチ、階段や他の施設はエストニアにおけるロシア語ではほとんど見かけない。ロシア人住民が多かったり圧倒的な地区では一定程度そうした資料は存在するが、他の地区では事実上存在しない。そこでディアスポラ言語特徴となっているのは言語活動資料の特質ではなく、むしろ言語活動そのものの有無の事実、そして同じくその普及の程度である。例えば、ロシアの現在のコミュニケーションでゲーム交流とそれに伴う操作法の幅が広がっているのに対して、ディアスポラ状況下の言語ではそれはほぼ特有のものではない。様々な資料の分析 (文献リスト 6, 7, 13, 15, 16, 17, 20, 21) が示すところでは、エストニア

の全体的な状況は中立的で、評価は乏しく、主観に彩られていて、それが現地のロシア人環境にも影響している。確かに、ゲームの端緒は特に一部の分野には存在するが、現地ロシア語言葉の明確な特徴ではない。同時に我々の地に特質と見なせるものとして、例えば多言語共存状況そのものの逆利用がある。そうした特殊例として「予測不可能な」言語ゲームがあり、それは滑稽さを醸し出す翻訳のしくじり遊びで、残念ながら失敗は度々生じて、冗談の褒美に料理が出される遊びである。現地の言語頭脳活動とそれをロシアのものと相関して研究することは重要な研究分野である。

そんなわけで、ディアスポラの言語活動特質は、第一に、十分明らかで型にはまって表現された現象（語句、語結合、文法指標）であり、第二に、逆に、あまり目立たない言語手段の多くのケース（言語内省、時、場所、言語実践の特質、評価など）で曖昧化している。前者は発見や分析だけでなく、変化させ修正させるのも容易であり、それはディアスポラ言語活動でしばしば行われている。他方で、後者は言語単位のみでなく心理的、価値観的、認識論的な深層に関わっている。メタ言語の内省や空間的・時間的現地化やディアスポラ言語活動の類似点を分析する際には機能的意味論的概念を援用するのが適切であろう。エストニアのロシア人ディアスポラのこうした特質はようやく研究が始まったばかりであり、まさにこの方向の研究が現在最も前途有望であると思われる。

### 文献リスト

1. *Адамсон И.* Динамические процессы в лексике таллинских газет на русском языке (на примере двуязычных изданий) // *Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры.* Тарту, 2009.
2. *Бурдакова О.* Прибалтийско-финские заимствования в русских говорах Причудья. Диссертация на соискание ученой степени *magister artium* по русскому языку. Тарту, 1998.
3. *Вепрева И.Т.* Языковая рефлексия в постсоветскую эпоху. М., 2005.
4. *Высоцкая И.В.* «Свое» и «чужое», или взаимодействие кириллицы и латиницы в современном рекламном тексте // *Лингвистика. Вестник Нижегородского ун-та им. Н.И. Лобачевского.* 2010. № 4 (2).
5. *Дуличенко А.Д.* Русский язык в постсоветской Прибалтике: проект социолингвистического исследования // *Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. Новая серия. VI. Проблемы языка диаспоры.* Тарту, 2002.
6. *Евстратова С.Б.* Языковые средства выражения оценочности в газетных заголовках (на материале русского и эстонского языков) // *Труды по русской и славянской филологии.*

Лингвистика. Новая серия. V. Русский язык: система и функционирование. Тарту, 2001.

7. *Евстратова С.Б.* Экспрессивная лексика в русскоязычной прессе Эстонии // Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. Новая серия. VI. Проблемы языка диаспоры. Тарту, 2002.

8. *Евстратова С.Б.* Использование русского языка в средствах массовой коммуникации Эстонии // Слово. ру: балтийский акцент. 2012. №2.

9. *Зеленин А.* Язык русской эмигрантской прессы (1919–1939). Санкт-Петербург, 2007.

10. *Иссерс О.С.* Новые дискурсивные практики в современной России // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.

11. *Иссерс О.С.* Речевое воздействие. Москва, 2009.

12. *Костанди Е.И.* Прагматика новостного дискурса // Взаимодействие языков и языковых единиц: русский язык в культурно-коммуникативном пространстве новой Европы. Вып. 1. Рига, 2005.

13. *Костанди Е.И.* Отличительные особенности языка современной русской прессы Эстонии // Scientific Papers University of Latvia. Slavonic Traditions of the Baltic area. 707. 2006.

14. *Костанди Е.И.* Прагматика перевода атрибутивных словосочетаний // La lengua y literatura rusas en el espacio educativo internacional: estado actual y perspectivas. SanktPeterburg–Granada, 2007.

15. *Костанди Е.И.* Оценочный компонент в устных рассказах староверов Причудья // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. X. Очерки по истории и культуре староверов Эстонии. II. Тарту, 2007.

16. *Костанди Е.И.* Оценочная лексика в устных рассказах староверов Западного Причудья: слово – текст – культура // Слово и текст в культурном сознании эпохи. Ч. 2. Вологда, 2008.

17. *Костанди Е.И.* Аксиологический компонент разговорной речи // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XI. Язык в функционально-прагматическом аспекте. Тарту, 2008.

18. *Костанди Е.И.* Роль прагматических факторов в формировании особенностей речи диаспоры // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.

19. *Костанди Е.И.* К вопросу о роли прагматических факторов в формировании специфики языка диаспоры // Русистика и современность. Сборник научных статей. Рига, 2011.

20. *Костанди Е.И.* Текстоброзрающая функция оценки (речь жителей острова Пийриссаар) // Acta Slavica Estonica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XV. Очерки по истории и культуре староверов Эстонии. III. Тарту, 2012.
21. *Костанди Е.И.* Реклама в условиях диаспоры: проблемы перевода // Текст, культура, перевод. Сборник статей по материалам международной конференции 23–25 мая 2012 года, Рига, Латвия. Рига, 2012.
22. *Костанди Е.И.* Метаязыковые единицы в разговорной речи диаспоры // Scientific Papers University of Latvia. Linguistics. 772. 2012.
23. *Кронгауз М.А.* Русский язык на грани нервного срыва. Москва, 2009.
24. *Кюльмоя И.П.* Специфические черты языка русской диаспоры Эстонии // Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. Новая серия. III. Язык диаспоры: проблемы и перспективы. Тарту, 2000.
25. *Кюльмоя И.П.* Речь русской диаспоры Эстонии: тенденции развития // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.
26. *Моисеенко И.М., Замковая Н.В.* Статус русского языка в Эстонии и проблемы, связанные с его преподаванием // Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. Новая серия. VI. Проблемы языка диаспоры. Тарту, 2002.
27. *Моисеенко И.М., Замковая Н.В.* Затруднения в словообразовании и в словоупотреблении в речи учащихся-билингвов // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.
28. *Моисеенко И.М., Замковая Н.В.* Типичные ошибки в письменной речи учащихся-билингвов, получающих образование на эстонском языке // Язык и культура. 12. Киев, 2010.
29. *Новоженова З.Л.* Русский язык в новых дискурсивных пространствах: реклама ...божественного // Проблемы речевой коммуникации: Межвуз. сб. науч. тр. Вып. 8. Саратов, 2008.
30. *Очерки* по истории и культуре староверов Эстонии. I. Тарту, 2004.
31. *Паликова О.Н.* Русский язык в рекламных каталогах Эстонии // Humaniora: Lingua Russica. Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.
32. *Ремчукова Е.Н.* Лингвокреативность рекламного слогана // Humaniora: Lingua

Russica. Труды по русской и славянской филологии. XIV. Развитие и вариативность языка в современном мире. II. Тарту, 2011.

33. *Ровнова О.Г., Кюльмоя И.П.* Говоры староверов в современной Эстонии // Русские старообрядцы: язык, культура, история. Москва, 2008.

34. *Труды по русской и славянской филологии.* Лингвистика. Новая серия. III. Язык диаспоры: проблемы и перспективы. Тарту, 2000.

35. *Труды по русской и славянской филологии.* Лингвистика. Новая серия. IV. Русские староверы за рубежом. Тарту, 2000.

36. *Труды по русской и славянской филологии.* Лингвистика. Новая серия. VI. Проблемы языка диаспоры. Тарту, 2002.

37. *Туровская С.Н.* Русский язык в странах рассеяния: в поисках ориентиров // Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. Новая серия. VI. Проблемы языка диаспоры. Тарту, 2002.

38. *Щаднева В.П.* О месте и лингвистических особенностях русских официально-деловых текстов в языковой ситуации современной Эстонии // *Humaniora: Lingua Russica.* Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.

39. *Щаднева В.П.* Характеристика современного эстонско-русского перевода утилитарных официально-деловых текстов // *Русистика и современность.* Сборник научных статей. Рига, 2011.

40. *Acta Slavica Estonica.* Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XV. Очерки по истории и культуре староверов Эстонии. III. Тарту, 2012.

41. *Язык диаспоры.* Проблемы и перспективы. Материалы III международного семинара. Рига 3-5 февраля 2000 г. Москва, 2000.

42. *Humaniora: Lingua Russica.* Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. X. Очерки по истории и культуре староверов Эстонии. II. Тарту, 2007.

43. *Humaniora: Lingua Russica.* Труды по русской и славянской филологии. Лингвистика. XII. Активные процессы в русском языке метрополии и диаспоры. Тарту, 2009.

#### 解説

当論文はネット公開雑誌「Слово.ру: Балтийский акцент №1. 2013 (言葉. ロシア、バルトア  
クセント、2013年第1号)」のPDF版を基に翻訳したものである。

論文著者のエリザベータ・コスタンデイ女史は、2011年のモスクワ国立人文大学で開催された「«Русский язык зарубежья» (外国でのロシア語)」国際大会の参加発表者名簿によると、エストニアのタルトゥ大学哲学部スラブ文学科ロシア語講座所属の助教授で、「エストニアのロシア語」をテーマに発表している。彼女の1991年からの執筆論文リストを見ると、エストニアにおけるロシア語の統語法・語順の変容を研究したもの（広い意味でディアスポラロシア語研究）、新聞や翻訳文学作品を資料としてのエストニア語とロシア語の構文比較研究、最近では言語頭脳活動をテーマとしたものなどが目立つ。

タルトゥ市はエストニアの東南部に位置し、バルト海沿岸からは遠く、どちらかと言えばロシア国境に近く、ロシア語話者住民が多いことで知られる。タルトゥ大学はスウェーデン統治時代の17世紀半ばに創設（旧名称はドルパト大学）された歴史伝統のある大学である。論者は2013年に現地に数日滞在し、タルトゥ大学を訪問し付属図書館を利用し、資料収集を行った経験がある（付録写真3, 5, 6参照）。タルトゥはロシア語話者人口が多いことに関連してロシア語使用環境が他の一般のエストニア諸都市や地方とは異なり恵まれているものの他の旧ソ連諸国におけるロシア人集住地域と単純に比較することはできない。

一般論として言えることだが、社会言語環境は長い年月を経て歴史的に形成され、変化するものであり、その形成要素として500年以上もの歴史的深層に食い込んでいるものがあればそれを短期間で排除し変化させることは難しい。ロシア帝国が崩壊しソ連が誕生し、その後ソ連が崩壊してロシア言語文化圏の新生国家が現在14ヵ国誕生している。つまり、この100年ほどの間に国家社会体制の変化を3度体験しているロシア歴史文化圏の国が多い中で、バルト諸国の場合は社会言語環境の変化を人口統計データ、ロシア人の人口割合などの社会学的統計データのみを基に分析しようとしても無理な、歴史文化的背景があることに気付くことになる。

現在のエストニアの国家言語はエストニア語だけであり、言語法や言語管理政策・国籍法によってエストニア語保護政策を推進していて、公の機関ではエストニア語使用がかなり徹底してきている、ただし、商店の看板やテレビ画面ではエストニア語以外の諸言語にも出会う（付録写真1-6参照）。ところで、このバルト地域は13世紀のドイツ騎士団による侵攻征服以来、ロシア帝国に併合された18世紀以降も長らくバルト・ドイツ貴族の社会的経済的支配が強が残ったし、現在もその歴史的建造物があり歴史上の人物の名を冠した施設等が少なくない（付録写真3参照）。

ロシア的文化基盤の形成はタルトゥやタリンで19世紀半ば頃によく始まり、19世紀末のロシア化政策促進時期からエストニアとロシアとの繋がりが強くなり、都市のロシア人の割合は10%ほどに増えきたが、さらにロシア人社会・ロシア文化要素が目立ってくるのは戦後ソ連時代以降のことである。いずれにしても、バルトの現地に数百年以上も住んできたロシア人社会の規模・都市は限定的である。この意味では、ウクライナやボルガ中流地域のチュルク系ウラル系民族文化圏に



におけるロシア人コミュニティの方が規模・範囲は大きく、歴史的にもはるかに根強い。

当論文ではかなりな部分はエストニアにおけるロシア語の地位とロシア語使用の主要分野であるマスメディア、学校教育、文化領域における概説的記述が、具体的データを含めて在外研究者にとっては興味深いものである。マスメディアや教育関係の具体的データは他の国、例えばラトビアやウクライナやカザフスタンなどと比較すればさらにエストニアの独自特性が見いだせるものと思われる。当論文でもう一つの主要テーマとなっているのはメタ言語としてのロシア語運用実践特性、言語的内省、多言語併用状況における言葉遊びも含めての言語的頭脳活動の数々、エストニア語やエストニアのレアリアに影響されるロシア語表現（単語・語結合、文法特徴）について、具体例を示しながら概説している。

ソ連解体後の独立国やロシア連邦内の共和国に住む人々の言語使用環境変化は著しいものがあり、これをテーマに研究する者は多く、論文・著作も多数に及ぶ。ところで、この社会言語学の分野は様々なアプローチ方法があり、専門家も社会学や文化人類学、政治学、歴史学、文学、語学、言語学、ジャーナリストなど実に様々な分野に所属し、資料も多様である。

論者は外国のロシア研究者として特に日本とは異なるレアリア状況の認識から始めなければならぬので、或はまずそれを背景として言語運用実践を特徴づけることが最重要と考えている。ロシア語話者による日常の運用実践がそれぞれの現地のレアリアにいかに関与を受けて変容するのかについては外国滞在のロシア人教員が熱心に研究しているのを知っているが、それは著者には二次的なことのように思える。たぶん、ディアスポラ環境が3世代続けば、一般的傾向としておそらくバイリンガルは著しく少なくなり、ディアスポラ言語変容研究の意味は殆どなくなるのではないかと予測する。それは在日韓国朝鮮人や、在ブラジル日系移民の3-4世における例が証拠となろう。ただし、もしもある言語が世界的に、あるいは地政学的にほぼ世界的と言えらる範囲で通用している場合、例えば英米や中国出身のディアスポラ3-4世がその祖父母の母語である英米語や中国語を喪失しにくいと同じ現象がロシア語でも見られるかどうかその可能性は否定できない。ただし、ディアスポラの言語変容を検証してそれを一般化してみても、変容を決定づける要因は新たな言語媒体手段の出現や新たな環境、新文化の出現など様々なものがあり一般的な社会言語学の範囲に収まらぬものとなるのではと考える。

付録 エストニア現地写真 (2012年3月 芳之内撮影)

様々な言語表記のある施設・商店・テレビ画面等

1 首都タリン市内の宝石店 エストニア語とロシア語が併記



2 タリン市内の陶磁器の家 (エストニアと英語併記)



3 タルトゥ市内、作家・医師フェリマン居住地看板（エストニア語とロシア語併記）



4 テレビ画面（アルメニア人聖職者がロシア語音声で語り、エストニア語の字幕付き「そのように非常に苦しかった、そうでなくても大変だったのに」）



5 タルトゥ市内「高電圧注意」(エストニア語とロシア語併記)



6 タルトゥ大学本館(左奥の建物、円柱下の茶大理石左側にはエストニア語で、右側にはラテン語で大学名が記されている)

